

その3。《1863年》に焦点を定め、60年代のマネを重視することによって、フリードはマネを印象主義から分離する。これはマネから印象主義への連続性を強調してきた従来のモダニズム前衛史観に反旗を翻すものだ。ここで前衛史観とは、大略《草上の昼食》以降、絵画は徐々に何らかの主題の描出を蔑ろにし、代わりに線と色彩による構造として自律してゆくとみなす観点だ。しかしそもそも《1863年》を要請してきたのがこのモダニズム前衛史観ではなかったか。こうして、論ずる主題と論者の立場に循環が仄見えてくる。

巻末でフリードは、1884年のマネ没後の売り立てカタログ序文に見える「絵画の本質的な価値」なる表現に、そうした前衛史観の誕生を見る。その反面この序文が、マネから印象派への系譜を正当化＝正統化する美学的・商業的かつ政治的な意図に支えられていたことなど、フリードは決して認めようとはしない。あくまでマネの美的価値を顕揚し、その背後に見え隠れする政治的側面をひたすら忌避し抑圧するフリードのうなじの硬さに、フォルマリストとしての面目も躍如とする。だがそれはそこにフォルマリスト美学の誕生を自ら認知した当の「序文」の政治的意図——印象派の擁護——を否認することとも表裏一体なのだ。そしてこの否認行為がフリードの美学的な信条告白の原点の隠蔽に重なることも明らかだろう。

Michael Fried, *Manet's Modernism, The Face of Painting in the 1860s*. The University of Chicago Press, 1996.

連載②

# 揺らぐエドゥアール・マネ像

モダニズムの起源再考

稲賀繁美

三重大学・フランス文学

マイケル・フリードの名著『マネのモダニズム』がついに出了。647頁。「マネの源泉」以来ほぼ30年にわたる著者の探究の集大成であり、『没入と演劇性』、『クールベの写実主義』につづく主要3部作の到達点でもある問題作だ。毀誉褒貶なかばする当代きってのカリスマ的「研究者」は、なぜこのような膨大な労力と時間とをマネに傾注せねばならなかったのか。

この著作で中心的な位置を占めるのは《草上の昼食》という一枚の油絵だ。その扱いに3点ほど撞着がある。その1。フリードはマネが《草上の昼食》で話題を取った1863年の落選者展を重視して、《1863年の世代》なる枠組みを提案する。だがこれによって《1863年》に近代美術の出発点を見る構想そのものは温存されてしまう。しかるに1863年の落選者展でマネがスキャンダルを起こしたとする認識そのものが、「近代」の神話的虚構ではなかったか。実際当年に醜聞的のとなっていたはずのクールベの《法話の帰り道》は、今では忘却の淵に沈んでいる。その2。(静物画、人物画など、さらには水彩画や版画の技法といった)様々に分岐した絵画ジャンル特有の手法を強引にも《草上の昼食》でひとつの構図のうち実質上結び付けることで、マネは(準備下絵と完成作の区別といったアカデミックな)絵画の断片化を、制作過程の発生論的水準で廃棄したとする論点。それとして妥当するにせよ、この主張は結局のところ《草上の昼食》にモダニズムの誕生を集約するという暗黙の大前提に辻褄を合わせた統解だとはいえまいか。